

58.

季節の変化に恵まれた日本の風土に季語の必要は当然であります。

時代とともに行われぬ季語もあり、新しく生じる季語もあってしげんに交代します。しかし忘れてしまう古い季語でも遺産として大切なことがあるでしょう。

獺祭（かはをそまつり）——礼記から出た空想季題である。魚を捕食する獺が春のある期間先祖を祀るため魚を川岸に陳列すると言い伝えています。子規居士（こじ）の別号は獺祭書屋で、自分を獺に譬え書物を大切にす意のようであります。

春一番——新聞などに使われる気象語であります。二月の末か三月の初めの頃の暖かい暴風で台湾坊主とも俗間で言います。実際にこれが南からやってくればにわかには春らしい日本を見る感じがいたします。

絵踏——または踏絵。禁教の江戸時代にキリストを信仰する者に強制して絵像を踏ませたのであって、廃れた季語となりました。歴史に興味を寄せる面白い季語ではないでしょうか。

59.

四季の変化ある自然を風詠するのが俳句である。要約すれば俳句は花鳥諷詠であると旧師虚子が仰ったことを我々は守るのである。新しい俳句は四季の変化に敏感となり表現を工夫すれば生まれてくる。

さて中春の季語解説にうつる。

貝寄風（かいよせ）——春一番ともいう強い南風が三月頃に吹く。漁師の言葉で暴風が貝殻を難波へ寄せるといふ。その頃四天王寺は聖霊会が行われる。また別に「涅槃西風」というのがあるが貝寄風と似た風と考えればよい。

啓蟄——季節の一つ名をいう。その頃には冬眠の蟻や蛙などが地中から這い出てくる。それが転じて地虫穴を出る…という季語と同じ意味に用いられてきた。

観潮（かんちょう）——彼岸の大潮は干満の差が大きく特に鳴門海峡はものすごく渦が巻くので、見物のために舟が出る。

60.

たとえ要談する場合があっても、まず挨拶を忘れない。挨拶はたいてい時節のことに触れる。そして相手の安否をたずねてみるのがわたくしたちの日常生活の習慣となっている。和やかな気分を作るのがこの挨拶にある。

さて季語は季節の言葉である。気候風土に恵まれているために豊富に季語は生まれる。枚挙に遑ないが、ここには珍しく解説を要する題を拾うことにする。

卯の花腐し（うのはなくだし）——陰曆四月を卯という。卯の花が咲く頃で、雨がかなり多い。この長雨が卯の花を腐らすほど降るといふ意。さみだれとか梅雨よりやや早い雨をさす。

ついでに卯波という季語はこの頃の海に立つ波である。波の穂の白さが卯の花を思う。

余花——春より遅れた桜の花をいう。残花ともいうが、残花では春の部にし、余花を夏の部に分類される事もある。これは気分の味わいで分けるので実体の相違ではない。

薪能——昔から奈良で行われている興福寺の薪能は篝火を焚いて夜まで四座が演じた。春日明神に奉納して演じるので今日の観光目的ではなかった。

今日では各地でこの薪能を真似て行われるため、本来の意味がぼやけてしまうようになった。